

令和 4 年 5 月 21 日現在

機関番号：83603

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K15201

研究課題名（和文）飯田下伊那地域を事例とした風景の史的変遷に関する実証的研究

研究課題名（英文）Methodological study on the landscape evolution in the southbound of Ina Valley

研究代表者

福村 任生（Fukumura, Mizuki）

飯田市歴史研究所・研究部・研究員

研究者番号：40833918

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：信州最南部の飯田・下伊那地方における歴史的景観の変遷に関して、現存する明治期の町村地図や建物台帳の歴史資料をGISデータとして数値地図化し、そこから近世から近代における景観構造の変遷を考察した。具体的な地域としては、旧飯田城下町地区、旧下川路村を対象に復元データベースの構築を行い、土地利用や宅地および民家建築の空間的統計情報を整理し、それぞれ当地域における都市景観と農村景観の具体事例として、景観構造の実態把握に努めた。本研究の主要な成果は、当地方の社会経済の近代化に大きく寄与した蚕糸業ブーム到来以前の明治20年代の農村景観の事例として、下川路村の景観復元図を作成したことに求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

飯田・下伊那地方に関する既往研究は主に社会史や経済史の分野に集中しているが、本研究は、それらの蓄積に学びつつも、これまで考慮されてこなかった景観の空間構造という視点を導入したことに学術的意義がある。また、これまで民家史研究の立場から当地域を代表する本棟造民家が研究されてきたが、これらの研究は現存する建築物に頼ってきたため、今日失われたその他の民家類型との比較考察が不十分であった。本研究では、明治期の町村役場史料の建物台帳を活用することで、本棟造以外の伝統的な民家類型を過去の景観構造と関連づけて研究するひとつの手法を提示した点も意義深いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In Iida-Shimoina region of Nagano Prefecture, there remains abundant historical documents of local governmental bureaus in the Meiji period. For the methodological point of view, it is important to utilize the cadastral records of land use and house records in these documents which testify the historical evolution of landscape. This study focuses two zones: 1) the central area of Iida city which evolved from the early modern castle town, 2) the whole area of Shimokawaji village as a typical rural zone alongside the river Tenryu. To analyze the historical landscape, it is essential to reconstruct the numerical data of land use and land shape in the past time on GIS, where the chronological changes can be visualized precisely on today's map. The main achievement of this study is the reconstruction of the numerical map of Shimokawaji village in 1890, which can be considered as the traditional rural landscape just before the great boom of sericulture which modernize this region.

研究分野：建築史・都市史

キーワード：歴史GIS デジタル・アーカイブズ 下伊那 文化的景観 近代民家 建物台帳 明治期地籍図

1. 研究開始当初の背景

未曾有の災害である2011年東日本大震災と前後して、従来の建築史および都市史研究の枠組み自体を問い直す試みが行われてきた。例えば伊藤毅による「都市インフラ論」や「都市史から領域史へ」といった関心はその代表的なものといえる(『建築雑誌』2015年5月号特集「都市史から領域史へ」)。伊藤の「領域(テリトリオ)」論において、重要な点は、近世日本の「三都」のような国家経済の中心をなす大都市のみならず、沼地や島嶼といった地理的辺境における居住環境の成立を都市史の重要な検討課題として取り上げたことにある。この立場において、商工業が未発達な農村的居住形態は、都市へ成長する発展段階の未熟な状態として劣位におかれるのではなく、山里や河川流域、湾岸地帯といった地理的枠組みのなかで、個性的に成熟する地域構造として認識される。

また、近年わが国で制度化された重要文化的景観の保存制度(2008年)は、成立から半世紀近く経つ伝統的建造物群保存制度(1975年)と異なり、広域に存在する文化建築遺産を総合的に評価する可能性をきり拓いた。文化的景観の思想は、上述の伊藤の都市史学の研究展望と根底において関わりをもつものである。しかしながら、従来の都市史研究は、都市を対象を絞り方法論を組み立ててきたため、農村地域を扱う上で必要な研究の道具立てを欠いてきた。応募者は、そのような現状に直面し、早くから当該分野の研究進展がみられたイタリアにおける景観研究の方法論について継続的に理解を深めてきた。イタリアでの方法論に依拠するならば、今日の地域研究のひとつの重要な課題は農業景観の変遷を近世から近代の測量地籍図史料に基づき実証的に復元・分析することにある。

日本では志賀重昂以来の美学的景観論の伝統があるが、これらにおいて近代の地籍図が活用されることは稀であり、主観的な印象に基づく景観類型論に留まる傾向が強い。近代的測量法の導入により日本各地で最初に作成された明治期の測量地籍図は、景観の過去を客観的かつ正確に把握するうえで代替の効かない貴重な史料である。これらの史料に基づき、個別具体的な地域を対象とした景観の実証的研究をいかにして実現できるか、またそうした研究成果がもたらす新しい文化的景観研究の可能性の検討が、本研究の「問い」の核心となった。

2. 研究の目的

歴史的建造物が関わる保存制度では、上述のとおり伝統的建造物群から文化的景観へというパラダイムの転換を確認できる。近年の動向として、2010年代になって西日本を中心に多くの重要文化的景観が選定されてきたことが注目されるが、東日本の重要文化的景観の登録数は西日本の半数にも及ばないという奇妙な偏りも認められる。この事実の背景には、上述のステレオタイプ化された美学的景観論の影響があると考えられ、新しい景観評価の観点や方法を獲得する必要があるといえる。文化的景観とは人々の居住と生産の歴史に結びついた景観であり、表層的な美観に内在する歴史的 성격の検討が不可欠である。

本研究はこうした問題意識をふまえ、これまで国の伝統的建造物群や文化的景観の保存行政の対象としては見落とされてきた南信州の飯田市および下伊那郡の諸地域を事例対象に選び、その景観の変遷を精緻に実証することを目的とする。方法論上の特色は、近代初期の地籍図や土地台帳等の課税調査史料に基づき、景観の社会=空間構造を即物的かつ実証的に分析することにある。つまり、これまでのわが国における美学論的な景観研究の限界を越え、新たな文化的景観の研究の方法論的基礎を築くことを意図する。そこで重要となるのは、地域の個性的な歴史の直接的な反映である、特徴的な土地利用や地割形態、土地所有といった景観の史的構造(=景観構造)の理解である。

飯田下伊那の地域形成において、近世に南信州の経済活動の中心として飯田城下町が成立したことは重要な意味をもち、これにともない郡部の山間地域でも三州街道などの脇往還の発達や、豊富な木材資源の供給を通して経済成長を遂げたことが知られる。

歴史的建造物の現存状況に目を向けると、近世以来の城下町の様相が色濃く残っていた飯田市の中心地区は、戦後の1947年4月の大火によって町並みの大部分が失われている。だが、地域の農村部や郡部の旧街道沿いには、江戸後期の本棟造民家、幕末から明治大正期の建築が相当数確認され、特に既往研究においては、養蚕関連の建築遺構が豊富に存在することが明らかにされてきた(金澤雄記『本棟造と養蚕建築』飯田市歴史研究所、2011)。

飯田下伊那地域では歴史的な建造物の総量は他の地域に決して劣らないといえるが、際立った中心が存在せず、またそれぞれが離れつつ存在していることが特徴的である。そのため「まちなみ」として、まとまった歴史的建造物群の存在を必要とする「伝統的建造物群」の概念では評価が難しい。それゆえ現代の「文化的景観」の方法概念を用いて、点在する歴史的建造物要素をいかに評価できるかが、今日の大きな課題である。そのためには建築がいかなる景観構造のなかで存在してきたのかを解明することが重要であり、これには近代初期の景観の綿密なフィールド調査記録に基づき作成された明治期の地籍図(旧公図)史料の利用が欠かせない。当地域では、研究用途での入手が難しい法務局保管の旧公図と土地台帳以外に、旧町村の役場文書のなかに公図の副本あるいは写しを含む課税関係史料が大量に保管されている。また役場文書以外でも

近世村落あるいはより小規模な自治単位を継承する「区」が保管する区有文書において、地券発行からその後の測量調査に関する丈量史料や地引絵図等の多種多様な地籍準備資料も多数保存されていることが確認されている。

現存する歴史的建造物の調査に加え、上述の地籍史料群を分析し、明治期地籍史料のもつ史料価値を明らかにしつつ、今後のわが国における文化的景観研究のケーススタディとするとともに本研究の独自性と創造性がある。

3. 研究の方法

本研究の第一段階では、地籍図とその関連諸史料が、各地域社会のなかでどのように作成され、また保管されてきたか、所在状況の把握と整理作業を踏まえて史料批判を行なう。次の段階において、GIS（地理情報システム）を用いた景観構造の分析に着手する。GISは従来の社会経済的な数値統計分析の限界をこえて、空間統計的な分析を可能にする景観構造分析の重要なツールであり、これにより現況の正確な数値地図上に明治20年代の地籍図を復元することができる。ここからかつての水路網や畦畔、地割や土地所有形態といった過去の景観構造を再現することが可能となり、現時点における景観との相違や過去の景観要素の残存状況が考古学調査のごとく明らかにできる。この復元成果を用い、対象地区の景観構造の特徴と現代までの変化を実証的に示すことが可能となる。

4. 研究成果

1) 2019年度

本研究の基礎資料となる明治期以降の地籍関連史料の調査を旧飯田町（飯田市歴史研究所所蔵）・旧座光寺村（麻績史料館）・旧下川路村（川路自治振興センター）・旧清内路村下区（下区有文書）の計4か所を同時並行で進めた。当初研究対象として検討していた、上郷地区は市町村合併等の過程で史料の分散・散逸が進んでおり、当面は手を付けないことが賢明と判断した。また、旧山本村地区については、明治初期の史料に損傷が多くまた行政区画面積が広大なため、今回の研究では対象としないことを決断した。代わりに、江戸時代から昭和前期までの行政文書がきわめて良好な状態かつ膨大に保管・維持されている旧下川路村の役場文書に着目し、下伊那地域の河岸段丘部の農村景観のケーススタディの中核とする方針を固めた。

本年度の主な研究成果は、旧飯田町役場文書では、飯田市歴史研究所で所蔵する「長野県下伊那郡飯田町図」（明治20年代の旧公図を大正期に縮小複製された地籍図）と「建物原簿」（家屋税課税のための基礎資料か）を組み合わせることで、1947年の飯田大火以前の明治大正期の都市空間に関する復元が可能であることを示した（第17回飯田市地域史研究集会2019年9月7-8日、福村任生「建物原簿史料からみる大正期の飯田町」（口頭報告））。また、清内路および川路における明治初期の地租改正事業から明治20年代まで土地台帳制に至るまでの土地測量に関するさまざまな文字史料の閲覧と、地図史料の撮影を進め、翌年度4月の飯田市歴史研究所の定例研究会で報告予定の研究報告「下伊那農村部の景観研究に向けて 明治期役場史料を中心に」に必要な資料の整理を遂行した。なお史料撮影にあたっては、2020年2月に東大史料編纂所の講師による講習会を受講し、デジタルアーカイブズ化に耐えうる撮影方法を学習し、一定の画像品質を得る方法を習得した。

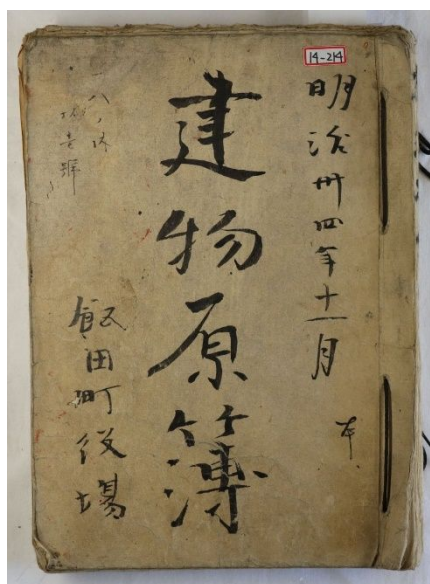


図1 飯田市歴史研究所所蔵「建物原簿」表紙（左）

図2 旧飯田町中心部における建物組織の復元例(右)

2) 2020 年度

主な研究内容として、明治期から戦前の町村行政史料が豊富に残る旧川路村役場文書の調査・撮影とそれに基づく農村景観の歴史の変遷に関する実証的な分析を進めた。主な成果は、a) 飯田市歴史研究所で発行した『史料で読む 飯田下伊那の歴史2』に明治20年代の地籍図作成を行った測量技士に関する論考の執筆、b) 2021年発行予定の『飯田市歴史研究所年報19号』への川路の景観構造と民家景観に関する論文を投稿(2021年5月段階で審査中)、c) 清内路と川路におけるGISでの2D,3Dの復元景観の数値モデルの作成(2021年度へ継続)を進めた。

上記a)では、ほとんど研究のない明治20年代の農村部地籍図の測量実態の解明の手掛かりとなる考察を行った。またb)では、明治20年代の地籍図をもとに田畑山林の土地利用景観と明治30年代の建物台帳による民家の立地および類型把握を行い、明治期の段階で本棟造民家と非本棟系の二階建て四間取民家が同時に混在する農村景観がかつて発達していたことを実証的に示すことができた。c)はこれらの研究において、手段として用いているGISの活用を一般公開するうえで有益となる画像表現を検討したものである。

さらに、当初の研究計画では対象としていなかったが、良好な歴史的農村景観を現在も残す高森町吉田地区を現地の協力者とともに視察した。今後の景観構造分析の重要なケーススタディとなるため、基礎資料となる明治初期の地引絵図(同地区の区有文書)のデジタル化撮影を行い、今後の研究展開の準備作業を進めた。



図3 明治期下川路村における民家の空間分布と屋根種別の色分け図

3) 2021 年度

これまで2年間の研究成果として、「明治期下川路村の景観構造の復元と民家類型」(『飯田市歴史研究所年報』19号収録)を公表した。このなかで農村地域では珍しい明治30年代の建物台帳を用いて、主屋の平面形態の点で正方形に近い平面をもつ本棟造の系統と平入で長方形平面をもつ別系統の存在が示唆されることを示し、また、その一部は萱葺であったことが判明した。こうした事実は現存している古民家調査からは明らかにされ得ないものであり、史料の詳細な読み取りを通じた景観の復元研究の有効性を示すことができたと考えられる。また、こうした研究成果を大判の展示パネルにまとめ、川路地区公民館の文化祭へ出展した。さらに年度末には、川路の住民向け講座を開き、研究成果の公表を通じた地域交流にも取り組んだ。

一方、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、古民家の実測調査は難しい状況が続き、昨年度から検討していた高森町吉田地区の実測調査は実施を見送った。その代わりに、明治初期から大正期の地引絵図・地籍図史料の歴史GIS分析を主な研究内容として、飯田市内の伊賀良地区・座光寺地区・松尾地区・鼎地区・阿智村駒場等で比較研究を進め、特に近世にさかのぼる旧茶屋町・宿場町地区の地割形態の特徴として、6尺を1間とする江戸間をモジュールとするものと、6尺3寸を1間とする京間をモジュールとするものの二種類が想定できる可能性を発見し、そうした知見を上伊那地方の宿場町であった宮田村宮田宿の調査報告書に比較研究として寄稿した。これにより、旧伊那街道等の街道沿いの歴史的町場景観の形成に関する総合的な比較研究の可能性が開かれたといえ、今後の研究展開の足掛かりが得られたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 福村 任生	4. 巻 令和3年度
2. 論文標題 飯田市近郊の宿場町との計画寸法の比較考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和三年度宮田宿調査事業業務報告書	6. 最初と最後の頁 165～173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福村 任生	4. 巻 8
2. 論文標題 書評 赤松加寿江著『近世フィレンツェの都市と祝祭』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 都市史研究	6. 最初と最後の頁 92～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福村 任生	4. 巻 19
2. 論文標題 明治期下川路村の景観構造の復元と民家類型	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6. 最初と最後の頁 98～118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福村 任生	4. 巻 18
2. 論文標題 上飯田村・飯田町役場文書 「建物原簿」を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6. 最初と最後の頁 104～113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57299/ihrab.18.0_104	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福村 任生	4. 巻 18
2. 論文標題 川路地区の歴史的建造物	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6. 最初と最後の頁 124 ~ 129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57299/i ihrab.18.0_124	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福村任生	4. 巻 42
2. 論文標題 イタリア・ヴェネトにおける小都市および風景研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地中海学研究 = Mediterraneus	6. 最初と最後の頁 81, 104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福村任生
2. 発表標題 明治の地図史料を読む 旧川路村役場文書と歴史GISの試み
3. 学会等名 飯田市歴史研究所地域史講座
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福村任生
2. 発表標題 明治時代の地図から読みとく歴史的景観
3. 学会等名 飯田学輪大学(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福村任生
2. 発表標題 問題提起「暮らしのなかの景観 その歴史と継承」
3. 学会等名 第18回飯田市地域史研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福村任生
2. 発表標題 建物原簿史料からみる大正期の飯田町
3. 学会等名 第17回飯田市地域史研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 伊藤毅 編（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 鹿島出版会	5. 総ページ数 524
3. 書名 イタリアの中世都市 アゾロの建築から領域まで	

1. 著者名 飯田市歴史研究所 編（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 飯田市歴史研究所	5. 総ページ数 84
3. 書名 史料で読む 飯田・下伊那の歴史2 川路のあゆみ 近世から近代へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------